

ふるさとの いのちをつなぐ
『生物多様性こうち戦略』

普及啓発 活動報告書
—平成26年度—

高知県 林業振興・環境部 環境共生課

〒780-0850 高知市丸ノ内1-7-52
tel 088-821-4868 fax 088-821-4530
e-mail 030701@ken.pref.kochi.lg.jp
平成27年3月



高知県では、人と生きものが共に賑わう豊かな社会を目指すための基本方針『生物多様性こうち戦略』（平成26年3月策定）が私たちの暮らしに根差した指針となるよう、生物多様性の意義の普及啓発に取り組んでいます。本誌では、平成26年度の実践の一部を報告します。

【目次】

■キックオフフォーラム	2ページ
■ワークショップ	
・林業編 「森の力」	3ページ
・地域（土佐清水）編 「ジオパークにおける生物多様性の意義」	5ページ
・教育編 「すぐに使える環境学習プログラム」	7ページ
・守る編 「石鎚山系をシカから守る」	9ページ
・水産業編 「海洋温暖化の水産業への影響」	11ページ
・食と観光編 「自然の恵みが支える豊かなグルメ」	13ページ
・農業編 「高知の食を守り、活かす農業」	15ページ
・地域（嶺北）編 「地域の宝自慢」	17ページ
・サービス編 「生物多様性が支える暮らし」	19ページ
・知る編 「生物多様性って何？」	21ページ

生物多様性×こうち「ロゴマーク」にこめた想い。

高知県らしい生物多様性を一つのモチーフに表したい。
高知と言えば、豊かな森林を背後にそこから脈々と流れる川。
それらを受け止める黒潮。そして、自然が生み出す特産物や生きもの。
たくさん紹介したいものはあるけれど、高知県の代名詞、ヤイロチョウやゆず、
ヤマモモ、カツオに厳選。

この豊かな自然を私たちの暮らしとのバランスを保ちながら守り、人を含めた生きもの
のいのちが途切れることなく将来につながりますように。

そんな想いがこもっています。



「生物多様性こうち戦略」キックオフフォーラム

6月9日(月) (高知県立県民文化ホール グリーンホール) / 参加人数約300名



【内容】

第1部

「生物多様性こうち戦略について」 高知大学理学部教授 石川慎吾氏
「地域資源を活かした地域づくり」 てるはの森の会代表 河野耕三氏

第2部

パネルディスカッション「水と自然と人と」

パネリスト／

- ・写真家 高橋宣之氏
- ・農家レストランしゃえんじり 平塚聖子氏
- ・高知生物多様性ネットワーク 岩瀬文人氏
- ・馬路村総務課長 木下彰二氏

コーディネーター／

・石川慎吾氏

アドバイザー／

- ・河野耕三氏
- ・環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室 室長 奥田直久氏

森の力 ～5年、10年、…100年先を見据えた山師の仕事～

11月16日（高知県立森林総合センター）／参加人数 28名（林業関係者ほか）

【概要】

高知県の豊かな森林を守り、持続可能な森林経営を行っていくために、木や森が持つ本来の力を見つめなおしながら、100年先を見据えて「今、何ができるか」を考える。

2名の講師からの取組紹介後、グループディスカッションを行い、参加者の意見を共有した。

【講演 筒井順一郎氏（そま師 複合型林業経営）】

【内容】

林業に携わって50年、森と共に生きていくということはどういうことなのか。

林業経営の傍ら、サカキ・シキミなどの特用林産物を生産している筒井さん。林業の間をぬって、アイガモ農法の稲作に取り組む。水田に水を引く過程には、山水を活用したアメゴの養殖を楽しむ。森が循環する仕組みを把握し、少し手をかけることで森の恵みをうまく暮らしに取り入れている。

ー以下、筒井さんの講演内容から抜粋して要約ー

選木育林では、樹冠を見て、木の声に耳を傾ける。植栽した木全体のうち、18年生で50～60%、40年生で80%、50年を区切りに当初の84%を切っていく。そして材とする。アイヌの人は、“木を植える時は七代先を想定して植える”という。それだけの覚悟をして木と付き合っていく。

間伐しても森林の材積は10～15年で伐採前に戻る。切れば切るほど材積は増え、決して減らない。針葉樹林の森も適切に間伐すれば、切り株などが栄養源となり、水を蓄え、広葉樹林より保水力が優れている。

古者から「幹はあなたのものだが、枝や根などは山から持ち出してはいかん」と教えられた。この教えは、山の再生のために必要なこと。

現在の木材価格は過去に比べると大きく下落しているが、機器の価格は農業と比べると比較的安く、地元には木材市場や製材所なども整備され、林業がしやすい環境であり収益性も悪くない。



【参加者の宣言 私の一步】

- ・NPOとして、一般の人が森林に親しむ機会づくりに取り組みます。
- ・すぐれた林業経営の実態を見て、伝える。
- ・もっともっと修行して、良い技術、良い山を次世代につなぎたい。
- ・自伐林業、行政、民間との協働。

【講演 秋山梢氏（シマントモリモリ団）】

【内容】

大学時代に四万十川を訪れて以来、四万十川に魅了され、東京の大学を卒業後、四万十市「田舎で働き隊」に参加。任期がきた後も、地域に移住し、働くことを決意。自然のサイクルに合わせて、夏はカヌーのインストラクター、冬は山の仕事が秋山さんの職業となった。

ー以下、秋山さんの講演内容、質疑応答から抜粋して要約ー

最初は林業＝森林組合という思い込みがあったが、自伐型林業に出会い、冬だけ林業という選択がとれた。木材の搬出は、高密度に道を入れるので、軽トラとコンボ、それにチェーンソーを使うことができれば女性でもできる。山を持っていない自分は、山（仕事場）を確保するのに苦労するが、高齢で、手入れができなくなった地域の方から引き受けている。地域に住んで、地域の山を施業していると、だんだんとやってくれという声をもらうようになった。最初の一步が踏み出されれば、次につながるし、地域に暮らしていると、林業に加えて観光、農業などその土地土地で必要とされる仕事に携われる。いろんな所に根を張り、つながりをつくらないと田舎では生きられない。

【グループディスカッション】 テーマ「高知県の林業のために何ができるか」

参加者から出された意見

□新規参入への課題

- ・山を整備したいが、信用が無く任せてもらえない。新規参入者に山を貸す仕組みを作り、施業によって実績を積んでもらうサイクルができないか。
- ・信用を得るために、技術者の認定制度を創る。
- ・山をファンドのように集め、貸し出すことができないか。借りた人は自分の計画で施業し、施業実績が履歴書になる。

□今後の施業や林業に携わる想い

- ・豊かな生物多様性があるからこそ、生き方も多様性を持てる。いろんな自分でいられる。
- ・中山間地域に住んで林業に従事することの優れた点は、余尺があること。1つのことがうまくいかなくても、いろんな仕事をすることによってカバーでき、融通がきく。
- ・樹種が多様で、木の特性によって用途がある。熟練者になるといろんな木の特性を考えてモノをつくることができる。
- ・林業は活性化の可能性がある。山の恵・資源を財産としてため込むのではなく、活用する、生活のために利用することが必要。



ワークショップの様子

【参加者の声】

- ・自伐林家への支援について、秋山氏ほか移住者・Uターン者のお話を聞いて現場に持ち帰ってみたいです。
- ・山の価値として何を求めるか、大きな流れを意識することの大切さを学びました。
- ・筒井さんの山に対する考え方（生活するため）財産を守るため、お金を稼ぐためではない。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせる部分はありましたか」より抜粋

ジオパークにおける生物多様性の意義 ～生きものや人が主役のジオサイト発見～

11月21日 (竜串ふれあいセンター) / 参加人数 23名 (観光ボランティアほか)

【概要】

土佐清水市では、2014年4月から日本ジオパーク認定を目指す活動が始まっている。

ジオパークとは、地球の活動の跡を見ることができる自然の中の公園。特徴的な地質現象を見て知ることができるだけでなく、その地域に特有の生物の営みや人の暮らしを守り、それらを誇りとし大切に思う心を養い、ジオツーリズムなどに利用しながら地域の持続的な経済発展を目指す仕組みのこと。

このワークショップでは、土佐清水市観光ボランティア会など、他所から来た人に解説する立場の方が集い、今後の活動につなげるため、ジオパークと生物多様性について考え、意見を共有した。



【イントロダクション 「生物多様性とジオ多様性」 尾池和夫氏 (日本ジオパーク委員会)】

【内容】

日本列島はジオの目から見た時に、大陸とは異なり大地の要素がとても多様。これを「ジオ多様性」という。豊かなジオ多様性が豊かな生物多様性を支え、それが日本人の多様な文化を支えている。

土佐清水市は海が隆起してできた土地。日本には今36のジオパークがあるが、まだ海のジオパークはない。土佐清水市のジオパークでは是非海を見て欲しい。海の中の地質・地形とそこに成り立っている生物相を研究して、世界に発信してもらいたい。

海洋生物センサスという国際プロジェクトが世界の海の生物の多様性を調べた。その結果、日本の近海は世界の中でも最も豊かな海であることが示された。海が隆起して陸になり、そこに雨が降り、山から海に水と栄養が流れてくる。それが豊かな日本近海の生物多様性を支えている。

【参加者の宣言 私の一步】

- ・生物多様性を理解し地域に広めていきたい。・生物の多様性について日々の生活の中で見出していく。
- ・何だろう?と思ったことを一つ一つ知ろうとする ～自分とのつながりを見つける～。
- ・生物が「いる」ということだけでなく「なぜ」いるのかという魅力も伝える。
- ・土佐清水の良いところを、どんどん周知していきます!大学でも、来年以降の職場でも。
- ・森川里海のつながりを理解し学習する。・多様な生物との共存を目指してゴミはきちんと処理する。
- ・ふるさと土佐清水の良さを内外(市内外・日本国内外)に積極的にPRする。

【グループディスカッション】 テーマ「生き物や人が主役のジオサイト発見」

【内容】

土佐清水市や大月町において、地形や地質の特異性だけでなく生物多様性と関係のあるジオサイトのリストアップを行い、生きものや人の暮らしの視点からジオサイトとしての意味を考えた。

【リストアップされたもの】

- ・大月町のウバメガシ、足摺岬のヤブツバキ、海岸付近に多いツワブキなど、地域特有の景観をつくり、かつ、人の暮らしにも利用されてきた植物。
- ・下ノ加江川の上～中流域の水生物(アユ、イダ、ウナギ、ゴリ、川エビ、ツガニなど)や、河口付近の砂浜で見られる豊かな自然の営み(サクラ貝、ハマグリ、ウミガメの産卵など)。
- ・自然再生の取組で守られてきた多様な竜串の造礁サンゴ群、対照的なものとして、深海に生息し宝石として高価で取引される宝石サンゴ。
- ・各地で見られる海の生きものの生痕化石や貝の化石。 ほか

【まとめ】

70を超えるジオサイト候補がリストアップされ、地域としては、足摺岬、竜串、下ノ加江川が多く出てきた。そういう場所は特に興味深い地形・地質や生き物、人の暮らしが見られるホットスポットだと考えられる。なぜそれらの地域はホットスポットになったのか。

「なぜ?」を考えていく中にジオパークと生物多様性とのつながりが見えてくるのではないだろうか。



ワークショップの様子

【参加者の声】

- ・生物多様性の意味、また、ジオ(地形・地質)とのつながりが今回のワークショップでははっきりと見えてきた。
- ・最近、岩とか無機物について考えることが多くあったので、生き物の話は新鮮でした。
- ・生物多様性を身近に感じることができた。生物多様性とは、むつかしい事柄ではなく、身近なところにあり、自然に親しむことの延長だからです。
- ・生物、文化が「いる」、「ある」というだけでなく、「なぜ」いる、「ある」のかを知り、考え、他の人に伝えていこうと思います。
- ・今回のワークショップのような指導的立場の人を対象にした行事だけでなく、一般の地域住民を対象にした取り組みをしてほしい。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせる部分がありましたか」より抜粋

すぐに使える環境学習プログラム

～教室編・校庭編・フィールド編～

11月29日（こうち男女共同参画センターソール）／参加人数 14名（学校関係者ほか）

【概要】

自然環境について考える力を有する子供たちや若い世代を養うため、自然離れがみられる現代において、五感で自然を感じる機会を提供していく必要がある。

このワークショップでは、教育現場の状況に応じて使える環境学習プログラムを、参加者と一緒に体験し、作成した。

【教室編 森良氏（NPO法人エコ・コミュニケーションセンター）】

【内容】

『5アクション』みなさんの生活と生物多様性をつなぐものは？』ワークシートを使い、教室でできるプログラムを作成する。

「5アクション」①味わいます（食べよう）②ふれます（自然や生きものと出会おう）③伝えます（文章や写真で表現しよう）④参加します（自然や文化を守ろう・つなごう）⑤買います（環境にやさしい商品や行動を選ぼう）

教室の中にある“自然の恵みからできている「モノ」と“教室で行われる「活動」（給食やホームルーム、授業など）”を書き出し、それらのキーワードから考えられるプログラムを出し合った。

出されたプログラムの中から、メンバーが自然の恵みを保つために活動したいと興味を持ったものを選んで結果、今回は、“高知の山、里、海の恵みのオリジナルカレーを作る”というプログラムに絞った。「安全なものを食べているか」、「限りある地球の資源とは」、「材料の生産方法や調達過程、調理方法は」、「誰に相談するか」など、学びの場面を想定し意見を出し合った。



【参加者の宣言 私の一步】

- ・高知の自然や食といった恵みを楽しみ、慈しんでいきます！
- ・匂いのものを味わい、自然の素晴らしさを伝えます。
- ・毎日の食事の食材に高知県で作られたものを一つは使う！
- ・豊かな高知の自然の中でいっぱい遊ぶ。
- ・人と自然をつないでいきたいと思えます。

【校庭編 兼松憲一氏（高知県シェアリングネイチャー協会）】

【内容】

会場近くの児童公園を校庭と想定し、参加者と一緒にネイチャーゲームプログラムを5つのステップで体験する。（5つのステップ…①感覚をとぎすます、②生きもののくらし、③発見のよろこび、④いのちのつながり、⑤自然にこころをひらく）

生物多様性の理解と自然への観察力、分かち合う精神を高めるために役立つ、次のネイチャーゲームを講師から紹介し、参加者が体験した。

- ・ネイチャーゲーム① 自然の音を聞く（目をつぶり、聞こえる音に集中する。30秒間で何が聞こえたか発表し合う。）
- ・ネイチャーゲーム② 森の美術館（フォトフレームを自然やモノに被せて、タイトルをつける。発見の喜びを磨く。）
- ・ネイチャーゲーム③ 落ち葉顔（落ち葉を使って、見えたモノが自分に向かって発信しているように擬人化する。感動と気づきの重要さを磨く。）
- ・ネイチャーゲーム④ ジグソーパズル「自然の分かちあいとは」（3人1組で行う。1人目が白紙を5枚にちぎり2人目がシャッフルする。そして3人が協力して、無言で身振り手振りで元の形に戻す。）

【フィールド編 谷川徹氏（四国生物多様性ネットワーク）】

【内容】

学校周辺のフィールドで自然・環境プログラムを実施する際のコツや注意事項を交えながら、多種多様な屋外の環境で学ぶプログラムを参加者と共に考えながら作る。

生物多様性という視点を野外活動のプログラムにどう活かすか。学習効果をどう上げるか。参加者が互いに課題を共有し合い、頭と体を使って体験しながら作成した。

今回は、野外にある「自然からの恵み」を見つけてグループで共有し合い、そのテーマを「自然の中の本物の香りを知る」として嗅覚に絞ったプログラムを作成。

フィールド（校庭でも可能）で「香り」を探し、教室に戻り、紙芝居をグループで作成して発表する。“雨上がりの匂い”や“新緑の匂い”など、自然の中にあるものには香りがある。子どもの時に五感を鍛えていないと生物多様性はわからない。経験値をあげていかないと、自分が自然の一部ということに気がつかない。といった、幼少期の体験の重要性を参加者で再認識した。



ワークショップの様子

【参加者の声】

- ・具体的なプログラムを学べることができてよかった。
- ・教員になった時にぜひ実践してみたいと思います。
- ・ぜひ学級でも子供たちと一緒にやってみたいです。
- ・学校の先生が多かったのか、子供相手の教育内容でしたが、大人向けも必要だと思えますし、強く希望します。
- ・仕事やプライベートで時々話や活動をする場面があるので、プログラムの作り方・手法プログラムに活用できそうです。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせそうな部分はありましたか」より抜粋

石鎚山系をシカから守る

11月30日（いの町立本川プラチナ交流センター）／参加人数 21名（林業関係者ほか）

【概要】

二ホンジカによって甚大な被害を受けている剣山系三嶺山域の生態系を守る取組みが市民主導、行政との協働で行われている。

三嶺の事例から学び、石鎚山系をシカの食害から守るためにどうしたらいいのかについて、愛媛県及び高知県の関係者全員で議論し、今後の取組方針を立てた。

【講演 「三嶺山域のシカによる被害の変遷と対策」 依光良三氏（三嶺の森をまもるみんなの会）】

【内容】

三嶺山域では、2000年頃から中東山で被害が発生するようになり、以降、さおりが原等三嶺自然林地帯に被害が拡大していった。2007年～2011年頃が激特被害期であり、自然林地帯で林床の植生が消滅した。一部の場所ではシカ柵を設置して、柵内では植生が回復したが、それ以外の場所では森林の下層の裸地化が進み、表土が流出して、斜面崩壊の発生を誘発するようになった。深刻な自然林被害に直面した市民団体は2007年に「三嶺の森をまもるみんなの会」の組織化を図った。この会は市民主導のもと行政との協働により、防鹿柵の設置、立木へのラス巻き等のボランティア活動とシンポジウム開催、写真展などの普及啓発の二本立ての活動をしてきた。

2011年度以降白髪山周辺から自然林地帯でシカの管理捕獲が本格化した。2013年度までの間に約300頭を捕獲し、シカはかなり減少した。稜線部の植生は一定改善したが、自然林内は裸地のまま。管理捕獲が予算化された2008年時点で適切な対策をとっていたら自然林内のスズタケの枯死は防げた可能性がある。シカ被害の初期段階で、適切な対策をとることが重要である。

【話題提供 「石鎚山地の植物抄」 鴻上泰氏（高知県立牧野植物園）】

【内容】

いの町の中では、石鎚山系の一部である筒上山、手箱山と寒風山が植物のホットスポットと言える。植物相については、剣山系は専門店街、石鎚山系は百貨店に例えられる。石鎚山系の山々ではいろいろな種類の植物が生育している。石鎚国定公園は10,683haの面積があるが、この中にシコクシラベ林、ブナ林、ダケカンバ林、ササ群落、高茎草本群落、ウラジロモミ林などがある。

石鎚山系を中心に分布する固有植物としてシコクイチゲ、イシツチザクラ、イシツチミズキ、イシツチボウフウなどがあり、ほかにも貴重な植物種、特に地域に固有な種がたくさん生育している。

【コメント「石鎚山系をシカから守るために」 奥村栄朗氏（独立行政法人森林総合研究所四国支所）】

【内容】

愛媛県のシカの生息実態として、大きく南予南部、高縄山、東予東部の銅山川流域の3地域に分けられる。愛媛県では2012～13年度に石鎚山系二ホンジカ緊急対策事業として、生息状況調査、連絡会の開催、対策手法の提示などを行ってきた。

シカを低密度に維持するためには、一定の捕獲圧をかけること及び継続的な情報収集が必要である。登山者等からの目撃情報は、愛媛県生物多様性センターのHPに掲載されている。情報提供者が見て分かるような情報のフィードバックが重要である。愛媛県でのシカ捕獲数は1980年代半ば以降、一貫して増加し続けている。南予南部を除くと、近年、特に高縄山と東予東部で捕獲数が多い。

石鎚山系での対策が手遅れにならないためにも、今後の取組が重要である。

【全体討論 コーディネーター 石川慎吾氏（高知大学）】

一 出された意見

・民間が主導して行政に加わり、守る会をつくるのが当面の目標。下層植生がなくなり、裸地化した状況になってからでは手遅れで、コストパフォーマンスは最悪である。三嶺の二の舞を避けるために、早めの対策が必要である。石鎚山系には貴重な植物が多い。山全体を柵で覆うことは避けたいが、先手を打って貴重な場所に柵を作ることは必要になるかもしれない。

・植物のモニタリングのためには、植物研究者のネットワークが大切である。

・シカのモニタリング結果にあわせて、狩猟者の入る場所をコントロールし、効果がでる場所もある。しかし、石鎚山系には鳥獣保護区や、地形が険しくて狩猟者が入らない場所もあり、そういう場所で捕獲圧をかけるにはどうしたらよいか課題となる。

・狩猟者が入らない場所では、うまく管理捕獲するしかなく、そのためのプロ集団を育成しないといけない。

・シカの管理のためには、捕獲を仕事としていくことも必要となる。

・一頭当たりいくらという報奨金制では、管理が難しいところもある。狩猟者が入らないところでは、捕獲努力量に応じた金額ということも検討すべきである。失われる自然に対するコストとして、考えないといけない。

・くくり罠は設置が簡単だが、設置場所の選定や止め刺しなどについて、ある程度の技術が必要である。林業者との連携も重要である。高知県ではくくり罠を無償で提供している。石鎚山系でも守ることと獲ることを併せて取り組むことが必要だと思う。

・くくり罠による捕獲は県や自治体といった行政と民間の連携が必要となる。

まとめ

たくさんの課題に対する解決には、多くの人や立場の異なる人の間で情報を共有することが大事である。

石鎚山系でも愛媛県と高知県が協力できる組織を立ち上げ、民間が主導して、行政や大学等に入ってもらような形をとれるのが理想。



【参加者の声】

・愛媛・事業者の取組がわかった。

・石鎚山系を守るためにも今から対策が必要と強く感じた。三嶺の取組はモデルケースとして活用できる。

・直接できることは多くないが、機会を見つけて参加したり勉強したり情報共有の機会を作りたい。

・自分で何ができるかわかりません。ただ動物をかわいがるだけでは共存できないことを周知することはやっていきたいと思う。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせる部分はありましたか」より抜粋

【参加者の宣言 私の一步】

・四国の山の自然を守りたい。

・自分自身が勉強して、それを正しく伝えられるようになりたい。

・植物調査、植物観察会、トレッキング等でシカの食害に気を留めるようにする。

・旬のものを味わう。自然や生きものにふれる。地域の活動に参加する。環境にやさしい商品を買う。

海洋温暖化の水産業への影響

～漁業振興のために必要な対策～

12月12日（高知県水産会館）／参加人数 11名（漁業従事者）

【概要】

あらゆる生きものは私たちが生きていくための貴重な生物資源であり、水産業について言えば、漁獲物だけではなく、それらのエサになる生きものや微生物まで、全てが生物資源と言える。そのような考え方のもとに、生物資源を守っていく、というのが「生物多様性こうち戦略」の考え方である。

近年、高知県でも漁獲量の減少や漁家の減少などが問題になっているが、これまで行われてきた漁業振興のための対策は、産地における六次産業化など加工や流通に関する事柄が多いように見受けられる。このワークショップでは、自然環境の変化によって漁業に関わる生物資源そのものの質や量、漁場が変化している現実に対してどのような対策が考えられるのか、具体的に何が出来るかを漁業者と共に考え、意見を共有した。

【講演「海洋温暖化の高知沿岸への影響」 岩瀬文人氏（高知生物多様性ネットワーク）】

【内容】

この100年間で四国南方の海面水温は平均1.3℃上昇したといわれている。中でも冬の最低水温の上昇が著しく、これが海域の海洋生物にさまざまな影響を及ぼしている。

最も顕著なのが「磯焼け」で、カジメ海中林は最近35年の間に3分の1以下に減り、ホンダワラ類の藻場（ガラム場）では構成種が温帯性の種から熱帯性の種へと変化している。

一方で造礁サンゴは最近30年ほどで種数も面積も大幅に拡大し、温帯性の種から熱帯性の種への組成の変化も起きている。サンゴだけでなく、2004年頃からサンゴの天敵オニヒトデも各地で大発生しており、また、高水温によってサンゴが共生藻類を吐き出す「白化現象」も起きている。

魚類では冬季の水温が上昇したため死滅回遊魚が越冬できるようになり、南方系魚類が増加している。

これら海水温上昇の影響によって、高知県の水産業にも様々な影響が現れていると考えられている。海水温の変動を正確に予測することは困難だが、今後100年の間にさらに1.4～2.1℃上昇するといわれている。温暖化の影響はすでに顕れており、今後さらに温暖化が進むことを想定して、適応する漁業を考える必要がある。



【グループディスカッション】 テーマ「高知の漁業振興のために必要な対策」

【内容】

1. 近年の高知の漁業の変化について参加者が実感している事柄を出しあった。出された内容は、次の3つにまとめることができた。

①漁獲対象種の減少

- ・マグロ、カツオ、メジカなどの沿岸域への来遊の減少。
- ・ウマヅラハギ、クラゲがいなくなった（ウマヅラハギはクラゲを食べる）。
- ・アサリ、サザエ、ガシラがいなくなった。

②望まない魚種の増加

- ・シラスに混入するアカアミが増えた。
- ・タカサゴ（沖縄名グルクン）、青い魚（ソラスズメダイ・ルリスズメダイ・シリキルリスズメダイ）、サメが増えた。

③その他

- ・砂浜の減少、鵜などの鳥の増加、遊漁人口の過剰な増加、消費者の魚離れ。

2. これらの状況を踏まえて、今後高知の漁業が成り立つためにどうすれば良いと思うかアイデアを出しあった。

- ・土佐湾への大型湧昇礁の設置
- ・干潟の耕耘
- ・未利用魚の利用
- ・プライドフィッシュの普及など
- ・未利用魚の利用（他の漁業の邪魔になるサメのすり身利用）

水産業は自然環境の変化にとっても大きな影響を受ける産業であるため、温暖化によって変わりゆく自然環境にどのように適応していくか、難しい状況に直面している。



ワークショップの様子

【参加者の宣言 私の一步】

- ・人を幸福にする魚造り。
- ・漁業の開拓。
- ・後継者をさがす。
- ・市・行政への、漁業者への、後継者等の運動。
- ・魚類の開拓。
- ・魚釣りに挑戦。
- ・一日、一魚食。
- ・後継者を育てる。
- ・漁場の再生のための行動。
- ・これからの漁業を良くすること。

自然の恵みが支える豊かなグルメ

～食を知る、伝える、もてなす～

12月16日（高知県立県民文化ホール第11多目的室）／参加人数 18名（野菜ソムリエほか）

【概要】

食の現場では、生産者から受け取った食材とその思いを、素材の魅力を最大限に引き出し、さらに魅力あるメニューに変える調理法や人々の心をつかむ料理が日々考案され、“自然の恵みが支える豊かなグルメ”が産み出されている。

このワークショップでは、観光客からの人気を誇る高知のグルメを生物多様性の視点で考えるため、講師から取組紹介後、グループディスカッションを行い、参加者の意見を共有した。

【講演 「自然の恵みが支える豊かなグルメ」 吉川周佐氏】

(ピュッフェレストラン・エズ、野菜ソムリエコミュニティこうち)

【内容】

地元野菜を中心として提供しているピュッフェレストラン「エズ」。什器や調度品にも高知県産木材を使用している。料理長自らの手で安心して安全な食材をさがし、生産者に話を聞く。産地を訪れる度に、食材や地元に対する理解不足を痛感する。

自分たちの役割は、生産者様とお客様をつなぐこと、食を伝え・守り・育てる役割を担っていて、高知県の農業を応援し、信頼関係を築くことは、よりよい食の提供へとつながっていると感じている。

提供する食材を手に入れるだけでなく、地域との交流イベント（べっぴんさんの新鮮野菜市、新茶の茶摘み体験、農業体験ピュッフェ（食材を自ら栽培する））なども行い、生産者様、お客様双方の好評を得ている。



また、地産地消を次世代につなげていくことも重要と認識しており、県内の大学サークルや高校生との協同事業にも取り組んでいる。

吉川さんからは、県内産の食材を使用して作られたピュッフェが提供された。



【参加者の宣言 私の一步】

- ・地域をよく知り、誇りを持って伝えられるように、おいしい食材がわかる食べ方の工夫をする。
- ・自然の素晴らしさや季節の移ろいを感じて、写真や絵、文章などで伝えます。
- ・地元でとれたものを食べ、旬のものを味わいます。
- ・地域の活動に参加する。
- ・高知の農業、農産物を知る、使う、伝える。

【グループディスカッション】 テーマ「自然の恵みと生物多様性のつながりを考えよう」

【内容】

次のテーマ毎にグループディスカッションを行い、意見を共有した。

テーマ① 豊かなグルメを支える「自然の恵み」とは？

【出てきたキーワード】 太陽 四季 水 川 植物 動物 野菜 人 大気(清涼なる) 山 海 土の力 ミネラル
山菜 おいしい実 お米 在来種 微生物 まち 虫

「恵み」という概念についてグループにより多少の偏りはあるが、太陽や四季といった大きなカテゴリからお米などの具体的な恵みまで上がった。

テーマ② 自然の恵みが豊かなグルメになる「コト」あるいは「モノ」とは？

【出てきたキーワード】 人 農家 道具 思い 愛情 技術 知識 料理 調味料 土作り 栽培 新鮮さ 流通
ネットワーク(意味:つなぐ) 受粉 火

大きく分けて、人に関連すること(心の課題も含めて)、生きものに関する事、人と生きものが密接に関係することが出された。

テーマ③ 生物多様性や地域・グルメ・自然の恵みが成り立つために必要なものは？足りないものは？

【出てきたキーワード】 共存共栄 共存共益 四方よし (三方よしに「自然よし」という要素を加えた) 更新していくこと
伝える、育てる仕組みが必要で、それが持続につながる。

つながるという考え方が様々な形で出された。

テーマ④ 残していくために必要なこと、高知県らしさとは？

【出てきたキーワード】 四国独立 鎖国 地産地消 TPP反対 再生可能エネルギー 原発反対 旬 食品安全保障
技術知識 食べ方 いろんな植物、虫、動物 品種を守る 農業労働者
食の課題だけではなく、社会構造やエネルギーの課題まで踏み込んだ結果となった。

テーマ⑤ 高知県の中で出来ることは何？私たちが出来ることは？

【出てきたキーワード】

- ・地元のものを食べる。地元を知る。地元の旬のものを食べる。
- ・楽しむ(心の余裕を含めて)。
- ・森、海、山、川を汚さないように守ってゆく。
- ・対価報酬 安いことがいいことだという考え方は、高知県の自然資源や地域資源が損なわれ、持続できなくなる可能性がある。
- ・ファストフード・インスタントという簡単便利を避ける。
- ・育てて食べる家庭菜園の普及。
- ・地域集落の自給自足。
- ・企業が持続するには自然資源(自然の恵み)が必要。
- ・経済の仕組みを無視してはいけない。

【結論】

自然の恵みがあるからこそ高知県は地元の食材を資源として観光に活かすことができる。生物多様性も含めた自然資源・地域資源をきちんと認識し、持続可能な社会という基盤があって初めて、食や観光という産業が成り立つことを忘れてはならない。

恵みは「無料」ではないということを参加者で共有した。

高知の食を守り、活かす農業 ～縁の下の力持ち“生物多様性”～

1月16日（こうち男女共同参画センターソレ）／参加人数 25名（農業生産者ほか）

【概要】

農業は、田んぼが貴重な湿地帯を生きものに提供し、生物多様性の保全に貢献している一方、自然の循環機能を利用するという点で生物多様性に依存した産業である。高知県環境保全型農業の先進的な取組は全国から注目されており、生産物“高知野菜”は、安全で安心な食材として人気がある。

一方で、地域特有の資源・食材という視点で見ると、失われようとしているものがある。

今回のワークショップでは、守りたい自然資源として“在来種”と“山菜”を取り上げ、講師からの取組紹介後、グループディスカッションを行い、参加者の意見を共有した。

【講演 「在来種について」 押岡洋子氏（田村蕪株式会社プロジェクト）】

【内容】

2014年から始めた田村蕪株式会社プロジェクトは、仁淀川町で古くから栽培されている地域在来種の田村蕪を次世代に残し、流域の農業を活性化させることを目的に始まった。

活動内容は蕪主優待事業、食育活動、県内飲食店とのコラボ企画など。蕪主優待事業とは12月に田村蕪をはじめ、地元産の野菜・お茶の詰め合わせを蕪主に発送している。食育活動では、池川小学校の児童に種まきや収穫体験してもらった。県内飲食店とのコラボ企画では収穫時期である12月から1月に町内及び高知市内10店舗の協力を得て、田村蕪フェアを実施した。田村蕪をいろんな料理に供してもらい、自分たちでは考えつかなかったような料理になって食べてもらえた。

田村蕪の生産者の平均年齢は70歳代後半であるが、みんな生き生きしている。このプロジェクトの真の主役は生産者である。仁淀川町以外では、田村蕪は作りにくい。伝統の在来野菜は、地元の気候条件に合っているから良く育つのだと思う。



【講演 「山野草の生息域維持・採取・加工・販売」 山本優作氏（NPO法人高知県有機農業研究会）】

【内容】

高知土佐山地区で有機農業を営んでいる。豆腐を作るために大豆を生産している。

土佐山アカデミーの活動として、2014年4月に「森を食べられる人になる」という二泊三日のイベントを企画した。米と調味料以外はすべて山から食材を集めて料理するという企画で、タケノコ、ワラビ、イタドリ、タラの芽、ウド、ワサビ、フキなどの山菜を参加者と一緒に採って食べた。

現在は自分たちで7品目の山菜を組み合わせてセット販売をしている。一人で多品目を生産・採取するのは難しいので、何人かに協力してもらっている。旧土佐山村は平成9年に有機の里宣言をして、農業散布への補助金の支出を止めた。土佐山地区全体として取り組むようになってきている。土佐山アカデミーでは、自然の恵みを活かして暮らしていく方法をお互いに教えあっている。そうした暮らしの知恵を次世代に伝えていきたい。

【グループディスカッション】 テーマ「農業に関係する地域資源・自然資源及び地域の伝統について」

【内容】

農業に関する地域資源・自然資源及び地域の伝統について、それぞれのグループで書き出した。その中から共通項目を探すとともに、各自が最も重要と思う課題を選定した。

1)地域資源について

川と水、土地、種子、人、気象と天候、風景など。

そのうち、安定・持続可能な方向性にあるものとして、食事、ミネラル、手入れされた植林地など。

危機的な状態にあるものとして、耕作放棄地、放置された林、異常気象など。

2)伝統について

味噌、料理、どぶろく、餅、芝居、神楽、年中行事、祭り、川干、結い、焼畑、稲作、神事など。

そのうち、安定・持続可能な方向性にあるものとして、食事、味噌、道具など。

危機的な状態にあるものはあまり出されなかったが、イノシシやシカの増加、異常気象などは不安定化をもたらす要因としてあげられた。

神楽、結、川干などは、安定と不安定の中間的な位置づけとされた。

3)生物多様性との関わりについて

ミツバチ、イノシシ、シカ、雑木林など。

生物多様性を考えると、地域資源や伝統をなぜ絶やしてはいけないのか、というテーマが見えてくる。

水、土地、食といった課題、それに関わる人の在り方に対して、自分たち一人一人が、何ができるのかを考えることが大切である。



ワークショップの様子

【参加者の声】

- ・今の現状を知り、どんなことが自分にできるかを考えるよい機会になった。
- ・自分たちの周りに関することがあったので活動として活かしていけそう。
- ・手をかけ世話をしなければ何も得られない。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせる部分はありましたか」より抜粋

【参加者の宣言 私の一步】

- ・自ら作り、楽しめる食生活をすすめる。
- ・高知の伝統料理を覚える。
- ・高知の山間を今よりも少しでも良くして、次世代へ手渡す。
- ・今の景観・自然を残したい。
- ・生物多様性と水の大切さについて啓発を進めます。
- ・食べることの大切さ、生きることにつながることを子どもたちに伝えていく。
- ・お年寄りと関わりを持ち、生きる知恵を学ぶ。

地域の宝自慢

～嶺北の魅力、地域の宝さがし～

1月17日 (土佐町農村環境改善センター) / 参加者数 12名(嶺北地域の住民ほか)

【概要】

四国の中心部に位置し、地域外から多くの方が移住されている地域として注目されている嶺北。そこに暮らす人々が考える地域の魅力(お宝)を共有し、次世代に受け継ぐためにどうすればいいかについて考え、意見を共有した。

【参加者自己紹介 コーディネーター 川村幸司氏 (NPO法人れいほく田舎暮らしネットワーク)】

【内容】

「生物多様性こうち戦略」が策定されたが、それを身近に感じる機会は多くないかもしれない。今日は嶺北のお宝さがしということで、多様性をキーワードにして、嶺北の良さを引き出していきたい。

ー以下、参加者の自己紹介から出された意見ー

- ・有機農業をやりたいと思っていた。こちらに来て3年、里山にも目が向いてきた。
- ・農業のやり方次第で、環境を良い方向へコントロールできるのではないかと考えている。
- ・東日本大震災後、原発から逃れるために土佐町に移住してきた。田舎に学ぶことが多い。若いころ、環境問題に興味を持っていた。生き物とのうまい接点を見出しながら、暮らしていきたい。
- ・循環できる暮らしを目指している。以前はツアーガイドをしていたが、自分が認識していた生物多様性という概念に、人間が抜け落ちていたことに気づいた。
- ・嶺北は、自然が素晴らしく、暮らしやすく、バランスの良いところだと感じている。
- ・今の移住者は30代が多く、次いで20代と40代の人が多い。60代は少ない。高知県へ来る移住者の4分の1は嶺北に来る。嶺北はみんなが協力して頑張っているから、移住者が多い。
- ・農業と山の仕事をできるようにしていかないと、地域の人は増えない。今は竹に注目して、竹チップでの土壌改良、堆肥、竹炭、タケノコの生産などに活用しようとしている。自立心を持って地域の再生復興を考えていきたい。
- ・これまでは関東などで2-3年ごとに転居を繰り返してきたが、こちらに来て、それよりも長く住んでいる。土佐町では季節が感じられ、季節ごとの仕事(しめ縄づくりなど)や保存食づくり(干し大根、干し柿)などが残っている。都会に比べれば生活は不便だが、守られてきたものや残されているものがあることを感じている。きれいな水や土があるのが当たり前であることを、次の世代につなげていきたい。



【グループワーク】

【内容】

「地域の宝」を一人3個まで書き出して、共通性のあるものを探っていく。各グループから「宝」としてあげられた主なものは次の通り。

①農・山・自然に関わる宝

- 季節: 四季があるから、それに応じた仕事があり、作物がある。
- 水: 吉野川の濁りのない流れ。これを維持するには、自分たちは何をしたらよいか。
- 薪: 自分の家では煮炊きに利用している。生活の中心である。
- 山: 里山や森が身近にある。
- 野菜: 安く、おいしい。地元産だから新鮮。
- 棚田: 維持されているが、減りつつある。
- 山菜: タラの芽、コシアブラ、タケノコなどが採れる。
- 景観: 山の景色が素晴らしい。



②人と心に関わる宝

- 暮らし: 嶺北の暮らしそのもの、人材づくり、人の和、集落ごとの文化、魅力の発信、生活の知恵、自然の恵みを活かす知恵、循環型暮らしづくり。
- 子供: 地域の宝。
- 人材: 多様な仕事がある、工夫や知恵などを伝えていくことが重要。
- 人: 多様な活動をする人がいる、伝えていきたい知恵がある、結い(嶺北では「いいい」)など。

現代には、私たちの世代で消えてしまうかもしれない生活の知恵や工夫がたくさんある。これらが失われることは、私たちの社会にとっての損失と言える。

生物多様性の自然的な側面は「金」と「政」(政治・経済)で対応できるが、「人」や「心」に関わる側面には対応できない。人と心に関する課題については、地域の人々が何とかしないとイケない。

【参加者の声】

- ・自分だけでなく仲間や思いを同じくする人たちが地域に住んでいることが分かり、心強いと感じる。
- ・「『やらないからで』と思うことが残ったらそれがお宝」という言葉が心に残った。
- ・嶺北(その地域も)独自の暮らしや知恵が自然と密接につながっていることが分かった。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせる部分はありましたか」より抜粋

【参加者の宣言 私の一步】

- ・嶺北の応援団になる。
- ・きれいな水を次の世代まで伝える!
- ・じいちゃん・ばあちゃんの知恵を受け継ぎます。
- ・嶺北の四季ごとの手しごと・保存食作り・野菜の種まき・身につける。
- ・暦づくり。記録(写真・文)本をつくる。
- ・自然の豊かさを守る・自家生産物を使った伝統的食材作り。
- ・教育プログラム作り。自然×くらしの知恵⇄生物多様性。

生物多様性が支える暮らし

～事業と生物多様性の関連を学ぶ～

2月7日（こうち男女共同参画センターソレ）／参加人数 23名（事業関係者ほか）

【概要】

生物多様性と事業活動・社会活動の関わりはさまざまである。例えば、原材料を調達する段階での生物資源の利用や、製造段階における水などの資源利用、土地利用における生態系への影響及び廃棄段階における環境影響などがあげられる。

このワークショップでは、製造販売（作る・売る）などの事業活動から、消費（使う）・廃棄（捨てる）などの社会活動にいたるまで、それぞれに関わる“モノ”のライフサイクルと生物多様性の関わりについて考え、意見を共有した。

【講演 「生物多様性と生態系サービス」 常川真由美氏（四国環境パートナーシップオフィス）】

【内容】

私たちは衣食住や医療、文化、芸術など、さまざまな形で自然の恵みを享受している。

私たちの社会の基盤をなすこれらの恵みを保全し持続的に利用するために、生物多様性条約が結ばれた。その中でも、事業者は重要な役割を担っている。

事業者は消費者を含めた様々な主体と連携し、生物多様性の保全と持続可能な利用に取り組むことが求められている。事業者は、生物多様性に配慮した製品やサービスを提供することにより、ライフスタイルの転換を促し、自然との共生による持続可能な社会の実現に貢献することが期待されている。

一例として、株式会社西日本科学技術研究所大下氏が「土地利用における生態系への影響（軽減事例）」に関する事例紹介を行った。

【参加者の宣言 私の一步】

- ・様々な属性の人にワークショップに参加してもらうように働きかける。
- ・“行く”から“入る”の実践へ。（“川へ行く”→“川へ入る”）
- ・森林ボランティア活動で間伐を促進します。
- ・狩猟免許をとって森の保全と生物との共存。
- ・高知の生物多様性について話す場を作ります！
- ・暮らしの中で、ひと手間かけるきね！
- ・田舎暮らしは不便を楽しむ。
- ・未来の子供たちに残していくために。



【ワークショップ】

「知る・広める、つなげる、守る、活かす」のそれぞれのプランを盛り上げるためにはどうすればいいか？何が出来るか？

「知る・広める」

- ・環境活動支援センターえこらぼ→情報発信や環境教育などの場づくり、イベント等を実施。
- ・こうち生協→組織としてリサイクルの実践などに力を入れている。
- ・津野町地域おこし協力隊として四万十川のイベントなど。

「つなげる」

- ・虫の保護、鏡川自然塾など。
- ・植物の調査。
- ・生涯学習を中心とした環境教育や人材育成。

「守る」

- ・環境の保全管理を企業で推進している。
- ・高尾山の保全活動、専門家と連携した調査。

「活かす」

- ・地場製品のブランド化、地元のものを使うことで地元を知ってもらえる。
- そのほか興味のあるテーマとして有害鳥獣や地球温暖化防止があがった。



ワークショップの様子

「活かす」については河畔林の整備と炭焼きについての効果、そして地域製品の購入支援や伝統産業のブランド化、維持などについてのアイデアが出た。これらのアイデアを実現するために、どのようにして多様な主体と連携し、盛り上がり（気運）の場をつくっていくかが課題であることが認識された。「都会から来ている人なら都会のニーズがわかる。」という声を聞く。しかし、実際にそれを地元の人が見ると、たいしたことではないと思うことが案外多いのではないだろうか。そのギャップを埋めるためにも、例えばこうした学びの場に参加し、地域の人に気づいてもらうことが重要ではないかという意見があがった。

「知る・広める」「つなげる」「守る」については、多種多様な意見が出た。山の幸を活かすことや、教育（知識より知恵が重要）が課題ということで一致した。ここでの意見交換を集約し、「森（町から出て）に入って五感を磨こう」というコンセプトが提案された。

高知にはさまざまな知恵があり、「生きてゆく術」の宝庫といっても過言ではない。その知恵を伝えるためには、情報の相互交流や分野を超えたつながりが、今後ますます重要になってくることが再認識された。

【参加者の声】

- ・自分が何をしたいか見つめ直すよききっかけとなった。
- ・活かしたいと思ったことがたくさんあります。思うだけではダメだと思っています。
- ・気づきと情報発信、知ったことを次につなげるために実行していけるようにしたいと思った。
- ・いつもアイデアや思うことを実現するのにどうしていいかわからなかったが、実現に向けて一歩踏み出す方法が見えた気がします。

*アンケート問7「ご自身の活動に活かせるような部分はありましたか」より抜粋

生物多様性って何？

2月8日（こうち男女共同参画センターソール）／参加人数 16名（自然保護団体ほか）

【概要】

地球上には、3000万種を超える多様な生きものがいて、これらは、実は、わたしたちの日々の暮らしに密接につながっている。私たちの暮らしについて考えてみると、「生物多様性とは何か」、「生物多様性がなぜ大事なのか」が見えてくる。地球規模では見えにくくても、田んぼや畑に目を向けたら、地球の生命循環が見えてくることもある。

今回のワークショップでは「生物多様性」に関する講演後、グループワークを行い、参加者の意見を共有した。

【講演 「生物多様性って何？」 坂田昌子氏（国連生物多様性の10年市民ネットワーク）】

【内容】

生物多様性は「種」、「生態系」、「遺伝子」の3つの要素で説明できる。

種の多様性は、多種多様な生きものがたくさんいる状態のこと。しかし種の数だけではなく質も重要。外来種がたくさんいても良い状態とは言えない。今、地球規模で見ると1年間に4万種というすさまじい勢いで絶滅が進んでいる。生態系の多様性とは、山と言っても高山、里山、渓谷、針葉樹林、照葉樹林とさまざま。海も深海もあれば、干潟、磯、サンゴ礁などがある。このように生態系の種類が多いことをさす。

遺伝子の多様性とは、人を考えてみても、一卵性双生児以外はみんな違う顔で多様である。わたしたちは、これまで長い年月をかけて、遺伝子が途切れることなく続いてきたから存在している。これは生きものたちも同じこと。人間はたくさんいるから、ある地域の人が死んでもかまわない、とは言わない。それはタヌキでも同じ。それぞれの個体が、みんな異なる遺伝子を持っている。数が減り、遺伝子の多様性がなくなるとその種は弱くなる。一つの種が、同じ病気で一気に絶滅してしまう恐れもある。このように、種・生態系・遺伝子の3つが多様性を持っていることを生物多様性が豊かという。

20世紀の時代には、希少な生きものは天然記念物などに指定し守ろうという考え方が主流だったが、トキのようにエサとなる生きものが暮らす田んぼがなければ、野生では生きることができず絶滅をまねがれることはできない。このような経験から「生きものが暮らす場」という概念を組み込んだのが生物多様性の特徴だ。

日本の場合は水を中心に、生物多様性を考えるとわかりやすい。

日本は水が豊かで、なおかつ循環が優れた地域。日本の近海は世界で一番生きものの種類が多いがそれは森が豊かだから。例えばブナの木は水が大好き。雨が降れば水を吸い込み、余れば吐き出してくれる。葉のつき方が雨を受けて幹に集めるような構造だといわれている。こうした植物が作り出す湿潤な森から流れ出すミネラルなどの栄養分を含んだ水の循環が、日本の生物多様性を作り維持している。

一つの植物が消えると、昆虫など他の生きものも影響を受けて消えてしまうこともある。1種類ぐらい減っても大丈夫と思うかもしれないが、1つの種が減ると、関連する命が何種類も消える可能性がある。また1つ種が絶滅するということは、それを食べたり使ったりする文化も同時に消えることになる。人も生態系から受けるサービスを失う。

すべての生きものは、網目のように関わりあいながら生きている。人もこの網目の一つとして自然と関わり生きている、さらに言えば、関わりなくては生きていけない。これまでの人間中心の世界観を反省し、自然のとらえ方を見直すことから生まれたのが生物多様性という考え方。つまりとても社会的な言葉だと理解するとわかりやすい。

今、レジリエンス（自然治癒力、回復力）という言葉がよく使われている。日本は人が住まなくなった廃屋があつという間に植物に覆われてしまうほど自然の回復力が強い国。森から流れ出し、河川を通じて海へとつながる水の循環こそが、この日本の自然のレジリエンスを支えている。ダムや堰によって水の循環が滞ってれば、それを取り戻す政策や実践が必要。一度壊れてしまった生物多様性を取り戻すための実践的な事例などを紹介することを通じて、国際会議でも政策や実践を問題にしている。

生物多様性条約締約国会議はとても敷居が低い。登録さえすれば誰でも参加ができる。なぜなら、生物多様性の保全は、多様な人が関わらないとやれないからだ。生物多様性を保全する現場は地域にほかならない。国際会議に四国の優れた事例を伝えることを考えてもいいのでは？昨年開催されたCOP12では、琵琶湖の保全の取組事例を発表すると、海外からの視察や問い合わせが増え、関係者は大きな自信を得た。また他国の優れた事例を参考にして、自分達の地域で実行することもできる。世界の取組事例から学びや気づきを得、交流によって多様なつながりもできる。国際会議への参加と得る知見は今後、高知のためになると思う。ぜひ、若い人も参加してほしい。次の生物多様性条約締約国会議は、メキシコ！

【グループワーク】

次の2つのテーマにわかれて意見を出し合い、参加者全体で共有した。

・グループ①「今、私たちに何が出来るか」を出しあう。

地元の物を食べる、地酒を飲む、よごれた洗い物をペーパーで拭く、自然のなかで子供を遊ばせる、野菜作りを教える、電気を点けっぱなしにしない、必要以上にモノを買わない、環境保全等のイベントに参加する、などの意見が出た。

・グループ②「生物多様性の理解を広めるには何が出来るか」を出しあう。

「体験をしてもらう」ことが大切、子供達にどうやって生物多様性を知ってもらうか、学校とPTAの連携で体験学習が行われている地域（例：越知町）もある、地域にある博物館や自然の家などの施設を活用、学校教育に組み込むなどの工夫が必要、地域のみなさんに生物多様性の視点での自然との関わりを伝えることも重要、などの意見が出た。

【参加者の宣言 私の一步】

- ・高知の自然のすばらしさ、大切さを伝えていきます。
- ・自然と生活との関わりを再確認する。
- ・ジビエ料理のレストランめぐり。
- ・農業・水・動物との関わりについての啓発を進めます。



ワークショップの様子